

### 3 研究項目について

#### 1. 研究項目の連関

本特定領域の7種の研究項目は、互いに以下の連関を持つ。

古典研究を、大きく「読解」研究と「伝承」研究に分かつ。「読解」は、古典原典の読解作業と、それによる読解内容(=A03古典の世界像)に2分し、さらに読解作業は、原典の物理的情報の研究(=A01原典研究)と言語的情報の研究(=A02本文批評と解釈)、および両種の情報を電子機器により処理する技法の研究(=A04情報処理)に3分する。

つぎに、古典の「伝承」は、時代に応じて、古代・中世における伝承と、近現代における伝承に分かつ。さらに前者は、外国における場合(=B01伝承と受容(世界))と日本における場合(=B02伝承と受容(日本))に2分する。これに対し後者(=B03近現代社会と古典)は、近現代における伝統的な古典伝承のあり方とともに、「近代古典学」の装いを整えて一変した古典伝承を考察し、それを通じて我が国における古典のあり方の将来像を描く。この関係を表記すれば下の通りである。

#### 2. 研究項目の研究詳細

上記の7研究項目の各々について、研究の具体的な内容と、望まれる公募研究の詳細は次の通りである。

#### A01. 原典

調整班代表者 池田 知久

古典研究を行う上で第一に必要なことはテキストの蒐集であるが、学術的な検討に耐えることができるしっかりした研究を行うためには、現代のテキストに至るまで続いてきた原典の伝播・流布をふまえつつ、最善・最良のテキストを得るように努めなければならない。

しかしながら、原典をとりまく状況は、それぞれの文明によってまちまちである。

非常に早い時期に印刷術の発達と普及を見て、写本学が相対的に重要でなくなった中国のような場合もあれば、インドやイスラーム世界のように、近代に至るまでほとんどの古典が写本や口承によって伝えられ、その校訂本を作成することがまず必要な場合もある。また、西洋のように、中世以来、優れた古典学者たちの努力によって、多くのテキストに精善な校訂本が存在し、古典学におけ

		研究項目	(項目番号)	
古典学	読解	物質的情報:	原典 (A01)	
		言語的情報:	本文批評と解釈 (A02)	
		技法:	情報処理 (A03)	
		読解内容:	古典の世界像 (A04)	
	伝承	古代・中世	外国:	伝承と受容(世界) (B01)
			日本:	伝承と受容(日本) (B02)
		近現代	日本・外国:	近現代社会と古典 (B03)

る写本・版本研究の占める比重が比較的小さい場合もある。しかし、中国では近年、とりわけ1970年代以降に、多種多量の写本(紙に書かれた写本以外に、帛書・竹簡・木簡に記された簡牘など)が陸続として発掘され、古典学の写本・版本研究がホットな新局面を迎えつつある。一方、インド・チベットなどでは、現代に至るまで研究されることなく民間に伝承されてきた多量の写本が、今まさに滅びようとしているというような危機的な状況も存在する。

以上のような、原典をとりまく状況、特にその伝播・流布がそれぞれの文明によって異なるという特殊性を前提にしながら、原典の内外における諸写本・版本の所在を実地に調査・確認し、必要なものは購入しマイクロ・フィルム(マイクロ・フィッシュを含む)に撮り、またコンピュータによるデータ・ベース化を行って、テキストの比較検討、批判的校訂、系統づけなどの作業を進める。さらに必要が生じた場合には稀覯書の保存の方策をも講じなければならない。

古典が現代に至るまで伝承されてきた形態は、いずれの文明においても全て口承あるいは書写(抄写)であった。口承あるいは書写(写本)の、個別文明内部における種類・特徴・意義などについては、それぞれ相当多数の研究の蓄積があるけれども、しかし今日まだ一般的な理論が形成されているとは言えない。口承も最終的には書写に吸収され写本として遺される場合が多いから、したがって、原典研究のもう一つの課題として、古典伝承の実際の姿を文明横断的に考察しなければならない。その目標とするところは一般写本理論の確立である。

## A02 . 本文批評と解釈

調整班代表者 関根清三

古典の本文は、しばしば複雑な伝承の過程を経ており、それを解釈するにあたって、まずその元来の形を確定する必要がある。音韻、韻律、語形、語彙、構文、技法、体系等の精査、また研究分野によっては各種古代語訳との比較を通じ、その確定が試みられる。本項目の基礎的な課題は、こうしたいわゆる本文批評の実際と理論についての研究である。次に個々の本文の主題・文体等の検

討により、より大きな本文複合体の連関の中で、個々の単元を確定する必要がある。それが文学批評の段階となる。以上は文書伝承をめぐっての研究だが、古典の本文はしばしば文書として形成される前に、長い口伝伝承の段階を経ている場合が多い。その口伝伝承の諸段階を明らかにし、その際に働く歴史的諸要因や叙述意向について考察するのが、伝承史的研究となる。この口伝の伝承史を文書の伝承史領域へ継承したものが、続いて編集史的研究となる。本文の、文書としての第一段階から、加筆による補足注釈作業を経て、現在伝えられる最終本文に至る歴史を跡付け、そこでの編集意図を問うことが、編集史の主たる任務である。その際古代の作者・編集者は、彼らが生きていた集団の固有の生活の座(Sitz im Leben)に伝えられる文学類型にのっとって語りまた書いた、というのが、様式史的な視点である。様式史は自らの視点の妥当性を証明するために、出来る限り広汎に種々の本文を比較渉猟し、そこに共通する類型の収集と、そこに想定される有効な生活の座の確定をしなければならない。さて様式史を是認すると否にかかわらず、本文の作者・編集者、さらには伝承者・改竄者等が、精神的・思想的環境を陰に陽に前提としていることは、確かであろう。彼らが前提とした、そうした環境を伝統と総称し、彼らがどういう伝統を精神的環境とし、語の固有の場を踏まえて、本文を形成していったか、それを研究するのが、伝統史的研究に他ならない。こうした様々な解釈学の方法論を統合的に駆使して、本文の歴史の意味規定としての解釈に至ることが、本文解釈の最終的な目標であり、そのそれぞれの理論と実際について、各分野の研究報告と討論によって総合的な知見を開くことが、本項目の差し当たっての最大の課題となるだろう。

しかし以上は、いわゆる歴史的批判的解釈学の方向であって、近年ではこれに根本的な疑義を呈したもう一つの解釈学の方向もある。古典の本文を解釈するにあたってこの方向もまた無視するわけにはいかないはずである。すなわち地平の融合・解釈の葛藤を旨とする哲学的解釈学である。こちらの方向では、匿名の解釈者が一般的な方法ののっかって、本文の客観的な歴史の意味規定をすることなど、そもそも不可能であると考ええる。むしろ解釈者は一定の主観的な先入見をもって本文に対さざるを得ず、そうした解釈者の地平と本文の地平の葛藤、対話、あるいは融合といった過程こそが、解釈の作業に他ならない。そこでは個々の解釈者の主観的な地平が、先ず自

## A03 . 情報処理

調整班代表者 徳永宗雄

覚的に明化される必要があり、それと本文とのせめぎあいの過程が追求され、その都度解釈者の思想とからみあった意味での思想的な意味規定としての解釈が目指されねばならない。この点の探求は、従来の古典学ではしばしば等閑に付されがちだったが、本項目はこちらの解釈学の理論と実際についても積極的に取り上げ、B03.「近現代社会と古典」などの研究項目との対話を試みたいと思う。

さて解釈学のこうした二つの方向は、必ずしも敵対反目するものではなく、むしろ相補的な関係を築くべきものである。哲学的解釈学はできる限り客観的な歴史的解釈学の成果を取り入れなければ、単に独善と偏見に墮する場合があります、逆に歴史的解釈学は、哲学的解釈学の方向を加味して解釈者の主体的地平を吟味することを行ななければ、ただ思想的な無反省と研究意義をめぐる無責任に陥る危険がある。両方の解釈学は、では具体的にはどのような均衡にあって互いに裨益し得るのか、本研究項目は最終的にはそうした点まで総合的に問うことを課題とする。

最終の課題はしかしあくまで最終の課題にすぎない。そこに至るまでには、繰り返すが上述のあまたの個別研究の積み重ねが必須である。もう一度、本研究の基本はむしろこの最終の課題に至る過程にこそあることを確認し、その内容を要約するならば：(a) 本文の原形の確定からその歴史的・思想的意味規定に至る実際の検討を目指すことによって、上に挙げた様々な方法を、日本、中国、チベット、インド、イスラム、イスラエル、西洋など諸領域の古代から中世、場合によっては近世に至る、種々の古典本文に実際に適用し、解釈の実際的な成果を出すことが試みられる。また(b) 解釈の理論と技法をめぐる方法論的反省を自覚的に遂行し、歴史的方法と哲学的方法の統合の問題に収斂するような、古典学の諸分野における解釈学全般の理論と技法を把握し、交流と改善が図られる。そうした個別研究が、(a)(b)二つの側面の緊張関係に常に配慮しつつ、積み重ねられねばならない。その際には、B03のみならず、A01.「原典」の写本収集、A03.「情報処理」のコンピューター処理、さらにはB02.「伝承と受容(日本)」の和訳の実際などとの密接な連携が必要となるであろう。

そうした多岐に互る関心を備えた研究者の積極的な参加を期待したい。

デジタルテクノロジーの急速な発達に伴い、人文学の領域でもコンピュータを利用した研究が日常化しつつある。古典研究においても事情は同じで、デジタル資料の蓄積が進むとともに、これを使った研究がこれまでは見られなかったタイプの研究成果を挙げている。

しかしながら、研究者各人がそれぞれ異なった仕方でもコンピュータを使用しているのが現状であり、コンピュータの利用法に無駄が多く、かつ、資料の共有も思うままにならない場合が少なくない。このような状況に鑑み、古典研究におけるコンピュータ利用の問題を組織的に取り上げ、検討すべき時期にきていると考える。

人文研究におけるコンピュータ利用については、すでに重点領域研究「人文科学とコンピュータ」(平成7年度～10年度・及川昭文領域代表)が進行しているが、本特定領域研究では、この重点領域研究の成果を引き継ぎ、さらに古典学に特化されたコンピュータの利用法の確立をめざして、コンピュータ利用を重要なテーマの一つとする。

この研究班の主要課題は、次の四項目である。

### (1) デジタルテキストの作成と収集

古典文献のデジタルデータ化を促進するとともに、すでに作成されているデジタルデータの共有化を図る。

デジタルテキスト作成に関わる問題、特に特殊文字のデジタル化に関する問題を解決する。

対象文献の特殊性に制約されないデジタル化のプロセスを確立し、古典研究者共有の規範として普及させる。

### (2) デジタルテキストの分析

公募研究を通じて、古典研究におけるコンピュータの有効な利用法の開発を支援する。

かつ、個人レベルでのコンピュータ利用のノウハウを本調整班で集約し、その共有化を推進する。

(3) 古典研究に特化された文書整形法の開発に努める。

(4) 本特定領域研究を通じてメーリングリストを設け、古典研究者にとっての情報交換の恒常的な基盤を整備する。

## A04 . 古典の世界像

調整班代表者 内山勝利

古典とは、単に過去の知的・精神的遺産であるにとどまらず、世界の総体と其中で営まれる人間の生死の在り方について、とりわけ優れた洞察と英知のマトリックスをなすものであり、その内実は、いまなお汲み尽くせぬ豊かさや可能性を蔵している。古典との取り組みは、その意味において、決して過去に確立された固定的な規範をそれとして再受容することではなく、むしろ、われわれ自身の直面している現実そのものを的確に把握し、われわれ自身の生の指針を得るための最良の方途でもありうるだろう。当研究項目においては、古典作品を媒体として、極力新たな視点からそれを捉え直し、「現代に生きる古典」としての新たな可能性を引き出すことを目指すものとする。

もとより、学としての古典研究は、あくまでも厳密な文献的実証と精緻な解釈に裏付けされつつ進めなければならない。また、こうした方法的意識に支えられることによって、より深くより正確な文献理解を達成することが、古典の内に真に有効な示唆を見いだすための唯一の方法にほかならない。今般の特定領域研究においては、これまで各領域ごとの古典研究において蓄積されてきた成果に立って、領域横断的な比較とより高次の総合との試みにはじめて本格的に取り組もうとするものである。従来、ややもすれば、各古典領域はそれぞれに完結した世界として扱われ、他の領域については必要な限りにおいての面的・間接的な理解にとどまりがちであった。それらの間の有機的な連携を図り、成果を相互につき合わせることによって、全く新たなインター・ディシプリンの可能性がさまざまに生ずることが期待され、すぐれて重層的な思想の展開が期待されるであろう。特に、これまでの研究においては手薄に成らざるを得なかった各古典領域の周辺部分や相互の影響・伝承関係などの解明に飛躍的な進展が望まれる。またその成果は、それぞれの古典研究そのものにとっても、きわめて大きな意義をもたらすものであることは、言うまでもないであろう。

こうしたはじめての試みを効果的に遂行するためには、まず多様な古典世界を共通の基盤にのせて、真に有意義な比較・総合を行い得る方法の問題を再検討することが

ら始めなければならぬ。当面想定されるテーマとしては、

- 1) 国家および宗教についての考え方、特に両者の関係の比較的考察
- 2) 自然観と技術論、特に、エコロジック的観点からの比較的考察
- 3) 言語論、思想に於ける言語の役割についての比較的考察
- 4) 時間論、空間論の再検討
- 5) 古典的「理性」・古典的「合理性」の再検討と復権の可能性

などが挙げられる。さらに、参加者との実際の討議を通じて、論点と方法を具体的に策定していく必要があるが、むしろその過程そのものが、すでに各古典領域の比較・総合的な研究を目指す今般の試みにあたって、大きな意義をもつ作業となるであろう。

上記のように、研究は意識的に各古典学に固有の方法に則しつつ進めることに努めるものとする。そうした堅実な研究成果に支えられてこそ、優れた総合的成果の達成が期待されるからである。

## B01 . 伝承と受容（世界）

調整班代表者 江島恵教

特定地域の民族はそれぞれ固有の文化を形成・伝承し、民族的統一を維持する。しかし民族の流動化、あるいは他民族との接触・交流を通じて、その固有の文化には異文化の影響が及び、他文化を受容するとともに、同時にあたらしい文化システムが構築される。この場合、広義の文字化された古典は、文化の形成に密接に関係し、その維持の拠りどころとなる。

例えば、「ヨーロッパ文化」は、当初からそれだけで統一体をなしていたわけではなく、オリエント・地中海世界との関係性の上に徐々に形成され、アラブ世界への一時的移築と再移入、北方民族の流入などを通じて構築されてきた。ヨーロッパの古典は、確かにギリシャ・ローマ古典文化に多大な影響を受けているとは言え、その受容の在りかたは、地域・時代によって、様ではない。この場合言語システムの差異も考慮される必要がある。

## B02 . 伝承と受容（日本）

調整班代表者 木田章義

キリスト教の受容形態も、ローマ文化の拡張過程で異質の要素を取り込んでいる。

同じことは、アジアについても見られることであり、「アジア文化」と呼ばれるような同質の文化的統合体が存在するとは考えられない。かりにアジア諸地域に伝播された仏教を取りあげても、その受容形態は、地域・時代によって極めて多様なものとなっている。古典を伝承する強固な装置として機能した仏教という宗教が、受容される土着文化・言語システムの多様性などに影響され、変容しているのである。

このような視点から古典を研究することは、従来「伝承」の等質性を通じて固定されがちであった「文化的統合体」の解体を意味し、古典の伝承過程そのものに、異文化の要素を探り当てるといったメスを入れることであり、また異文化圏への「受容」は異なった言語・文化システムへの「翻訳」の問題として捉えなおされる必要がある。古典の「伝承と受容」という視座は、まさに文化横断的な分析・考察を目指すものである。

研究テーマとしては、

(1) 特定の古典(群)自体の、同一文化圏内における、言語の変容過程に即した伝承過程についての分析

(2) 特定の古典(群)自体の、異文化圏における、異なった言語・文化システムへの翻訳と受容の過程についての分析

(3) 特定の古典(群)に現われる特定の概念(例えば、神・絶対者・人間など)の、同一文化圏内における、伝承過程の変化についての考察

(4) 特定の古典(群)に現われる特定の概念の、異なった言語・文化システムへの受容と変容についての考察

など、また、それらを組み合わせたものが、本研究項目の課題となろう。特定の古典群の中で同一の概念がもつ差異性についての分析なども、テーマとなることは、言うまでもない。

かりに仏教に例をとれば、(1) インドにおける経典言語の変容と教義解釈の変化についての分析、(2) 広義のサンスクリット語から中国語へ翻訳されたときに起こった抽象名詞の抽象性の曖昧化、例えば「空であること」を「空」という漢字で翻訳したことの問題性についての分析、(3) インド仏教における「仏」の概念の変化についての考察、(4) その中国における変容についての考察、などが研究テーマとなる。

日本の古典の範囲は主として室町時代以前の著述とするが、テーマによっては時代を限定しない。

日本文学・日本歴史・日本仏教などの日本文化に関する、伝統的な研究は進んでいる。ただし日本文化は外国文化の影響によって形成された部分が多い。ある場合にはその骨格までも外国文化そのままを輸入したということもある。しかし外国文化がどのような形で日本文化に影響を及ぼしたのかという面では、まだ研究が十分になされているとはいえない。従って、日本文化の中の外国文化の影響を析出する方向での研究を必要とする。そして、それらの影響を除いたあとに現れるはずの、日本独自の部分を明らかにすることも重要なテーマである。特に古い時代では中国文化の影響なしには日本文化は形にはなりにくかったはずで、律令制度のもととなった『律令』が唐の律令とどのような差異があったのか、仏教経典がどのように理解されたのか、信仰の形態の差はどこにあり、その違いを生み出したのはどういう背景によるのか、日本書紀・古事記・万葉集にみられる中国文学的な表現や発想などを体系的に考察する。

外国の古典の受容そのものについては、それらの古典が具体的に、どのような形で受け入れたのか、それら古典に対する知識がどのような形で広がっていったのか、その時にどのような書物を利用したのか、また、編纂したのか、どのように消化していったのかというような問題、さらにそれら古典に対する意識がどのように変わっていったのか、各時代の文化的背景なども考慮しつつ、明らかにしてゆく。

外国文化の受容となると中国文化(中国語に翻訳された印度文化も含む)と西洋文化であるが、中国文化の中でも儒教・道教・政治体制・法律・仏教などがあり、仏教でも南都から真言宗・天台宗、そして鎌倉時代以降の禅宗などいろいろな範囲にわたる。これらの中国文化の受容の問題を、上記のような具体的な視点から分析してゆく。もちろん日本仏教が、どのような形で本来の仏教思想から派生していったのかという問題なども含む。

西洋文化については、室町時代のキリスト教の到来による、キリスト教の受容と幕末明治の欧州を中心とする

西洋文化の受容とが中心となる。キリスト教の受容に際しては、宣教師たちの宣教のための方針や宣教のために編纂した書物の研究、イエズス会の組織、日本を含めた東アジアの状況、日本のキリシタンたちの信仰の問題、政治との関わりなど、さまざまな問題がある。この分野の研究にはまだ、成果の積み重ねが多くはなく、さまざまな問題を調査してゆかねばならない。

幕末明治の西洋文化の受容は、どのような地域でどのような形で受容が始まったのか、それが政治とどのように関わったのかという問題や、文学・法律・思想などの面で、日本文化がどのように変容したかというテーマも重要である。明治以後の研究はある程度進んでいるが、幕末の研究はまだ不足している。それらの問題を具体的に分析してゆく。

外国古典の受容に関連して、中国文化の場合には、漢文の理解を日本語に写した漢文訓読S語が重要なテーマとなる。漢文訓読の歴史、日本語への影響、仏典なら宗派による違いなども考察すべき対照であるし、西洋文化の受容の際には、どのような翻訳文を工夫したのか、どのように単語を訳していったのか、当時の中国語の翻訳語彙との関連はどうなっているのかなど、やはり多くの問題がある。この分野の研究もさほど進んでいないので、テーマを限定しない。

## B03 . 近現代社会と古典

調整班代表者 中川久定

調整班「近現代社会と古典」に属する5人の計画研究代表者のうち、4人はヨーロッパ研究者であり、その領域は、中世哲学(中川純男)、中世文学(松浦純)、中世・ルネサンス文学(月村辰男)、近世文学(中川久定)に分かれている。この4人の課題は、それぞれの担当分野の時代をとおして、古代ギリシャ・ラテン文献(西洋古典)の研究、および新約・旧約聖書の研究が、ヨーロッパの中世、ルネサンス、近世をへて18 - 19世紀にいたるまで、どのような変容を受けつつ、引き継がれていったか、またこうした古典テキストの研究が近現代社会においてどのような意味をもつにいったかを検討することにある。

取り扱うべき問題は複雑であり、多様にわたっているのであるが、調整班としてのまとまりを維持し、しかも極度に一般的な概観の提示だけで研究を終わらせないようにするため、思想と表現という2つの側面から、中世以来の西洋古典学の継承と変容という主題を検討することに研究の焦点を限定する。

思想の観点からヨーロッパ古典学の流れを見る際に、最も大きな問題となりうるのは、中世以来確立されていた学的論証の2大原理「権威」と「理性」との関係をめぐる諸問題である。両原理間の関係はいかなるものであったか。どのような理由で、またどのような経過で「権威による論証」が衰退し、「理性による論証」にその座を譲り渡すことになったか。デイドロ/ダランベール編『百科全書』全17巻(1751 - 1765年)の諸項目の中から、両原理の決定的な争いと「理性」の勝利が、どのような形をとって浮かび上がってくるか。近現代社会は、『百科全書』によって確立されたこの「理性による論証」の立場をどのように普遍化していったか。

他方、修辞学の隆盛と衰退という観点から特に問題になるのは、テキストの学としての《Belles Lettres》の出現(16 - 17世紀)から、その変貌した形態《Littérature》の登場(18 - 19世紀)までの流れをたどることである。この場合、ロビネ編『百科全書補遺』全5巻(1776 - 1777年)中の諸項目(特にマルモンテルの一連の項目)が、学としての《Littérature》の登場を告げるものとして注目に値する。16世紀から19世紀にいたるヨーロッパでは、人文基礎教育の中心は修辞学に置かれていたのであるから、中等学校におけるレトリック教育の問題もまた古典の継承・研究という観点から私たちの研究の中心的主題の1つとなるであろう。

また、本調整班に属するただ一人の非ヨーロッパ文明の研究者である羽田正は、イランの国民的叙事詩『シャーナーメ(王書)』(11世紀)のイラン社会での伝承を詳らかにすることを通じ、『シャーナーメ』の伝統的「イラン人意識」が、ヨーロッパ近代ナショナリズムの影響の下に今世紀に誕生した「国民国家イラン」の「ナショナリズム」と、いかなる接点を持ったかを具体的に明らかにしようとしている。近代ナショナリズムに潜む古典的伝統の役割は看過されてはならないだろう。